ケストナーの戦後詩集に見られる教育的性格

―『自分の本に目を通す』、『短く簡潔に』を例として―

清 沢　菜 穂

1. はじめに

エーリヒ・ケストナー (Erich Kästner) は、戦前から詩人として活動し、1945 年までに『腰の上の心臓 (Herz auf Taille) 』(1928) 、『鏡の中の騒音 (Lärm im Spiegel) 』(1929) 、『ある男が通知する (Ein Mann gibt Auskunft) 』(1930) 、『椅子の間の歌 (Gesang zwischen den Stühlen) 』(1932) と、選集『ケストナー博士の抒情詩の薬箱 (Doktor Erich Kästners Lyrische Hausapotheke) 』(1936) を発表した。そして 1945 年以降にもさらに 3 冊の詩集を出版している。

『自分の本に目を通す (Bei Durchsicht meiner Bücher) 』(1946) は、戦後にケストナーが出版した最初の本である。作者は、この詩集が 1933 年以前に発表された 4 冊の詩集から選ばれた詩で構成されたものだと説明しているが (I, 371) [1)]、「極めて右で歌うこと (Ganz rechts zu singen)」(I, 248-249/ BDmB[2)], 72) 、「偉大な時代 (Große Zeiten)」(I, 231/ BDmB, 165) 、「ある男声のためのホテルの独唱 (Hotelsolo für eine Männerstimme)」(I, 233/ BDmB, 140) の 3 編は上述の 4 詩集に収録されていない[3)]。

その 2 年後に発表された『短く簡潔に (Kurz und bündig) 』(1948) [4)]は、戦時中に用意された詩を中心に構成されている。ケストナーは 1943 年 3 月の段

階で、既にエピグラム集の発行を計画しており、当時は「箴言と反論 (Sprüche und Widersprüche)」がタイトルの候補として考えられていた[5)]。この計画のために用意されたタイプ原稿を元にして、1948 年にオルテン (Olten) 社から『短く簡潔に』が出版された。この詩集は 1950 年に前書きと多数の詩を加えて、アトリウム (Atrium) 社より再度出版されている[6)]。収録された作品の中には、『ノイエ・ツァイトゥング (Neue Zeitung) 』紙上で発表されたもの、『ケストナー博士の抒情詩の薬箱』に収録されていたものが含まれている。

最後に出版された詩集が『13 か月』 (1955) である。拙稿「「9 月」に見るケストナーの社会批判性　－詩集『13 か月』試論－」では、『13 か月』に収録された詩「9 月」を一例に、主題の変化と特徴の継続性を考察した。しかし現段階では、ケストナーの戦後の詩集における主題の変化が『13 か月』にのみ認められる特性であるのかという点の考察が不十分である。

『自分の本に目を通す』が過去の作品の選集であること、『ケストナー博士の抒情詩の薬箱』とは異なり、政治的・社会的な詩を収録していること、『短く簡潔に』がエピグラム集であるということは、先行研究の中でも言及されている[7)]。また、Andreas Drouve は、時代批判と時代の予言という観点からケストナーの作品を考察しており、その際に『自分の本に目を通す』に再録された詩や、『短く簡潔に』に含まれるいくつかのエピグラムが持つ特徴に言及している[8)]。Remo Hug は『自分の本に目を通す』の前書きを引用しつつ、ケストナーの詩の有用性と、戦前の詩を通じた警告の失敗を作家自身がどのように認識しているかを考察している[9)]。しかし先行研究の中では、詩集そのものが持つ働きにはほとんど焦点が当てられていない。

そこで、本稿では『13 か月』を除いた 2 冊の詩集『自分の本に目を通す』と『短く簡潔に』を対象として、戦後のケストナーの詩集が持つ特性を分析し、戦後どのような意図で 2 冊の詩集を制作したのか、詩にどのような働きが期待されていたのかを考察していきたい。まず第２章では、２詩集に収録された作品と実際の社会または人物との関わりという観点から、作品の特性を分析する。続く第３章では形式に注目し、第４章では社会批判・時代批判的

な性質、警告としての性質に焦点を当てて、詩に見られる特徴を整理する。その後、２冊の詩集に見られるテーマについての考察を進める。第５章では「理性」と「愚かさ」、「教育」に関する言及を手掛かりに、戦後のケストナーがどのようなテーマに取り組んでいたのかを明らかにしていく。第６章では、特に批判と警告による「教育」という性格を踏まえて、作品にどのような働きが期待されていたのかを考察する。考察を進める際には、2 冊の詩集の特徴と、1933 年以前に出版された 4 詩集に指摘されていた特徴に共通項が見られるか、第二次世界大戦以前と以後の傾向に差異が見られるのかという点も合わせて検討していきたい。

2. 詩集の特徴（１）: 作品と現実世界の関連

2. 1. 時代との関連

戦前の詩集は社会批判や風刺を通じ、実際の社会との関わりを持っている点が特徴の一つであった。『自分の本に目を通す』と『短く簡潔に』に収録された作品の中にも、執筆当時の社会を連想させるものや、実際の年号をタイトルに含み、歴史的事象を想起させるものが見られる。

例えば、「1943 年の夕べの祈り (Abendgebet 1943) 」(I, 281/ Kub, 54) は戦時下の人間の祈りを記している。

私たちは現代的なカタコンベの中にうずくまっている
（また戦争だ、やはり私の好みではない！）
我々をお守りください、主よ、あらゆる異国の爆弾から
そして、もしできるのなら、味方の高射砲からも。 (ebd.)

この作品は終戦以前に書かれていたエピグラムの一つであり、当初のタイトルは「1940 年の祈り (Abendgebet 1940)」であった[10)]。

同じく年号を含むタイトルを持つ「1938 年のドイツの追悼碑 (Deutsche Gedanktafel 1938)」(I, 280/ Kub, 52) では、ある死者について次のように説明さ

れている。

ここで、人類を信じていた者が死んだ。
彼は、警察に許されていたよりも愚かだった。 (ebd.)

詩の中では、この人物についての詳細は説明されない。しかしタイトルに置かれた「1938」という年号は、読者に現実の 1938 年を想起させるであろう。1938 年はオーストリアがドイツに併合され、ズデーデン地方の割譲が承認されるなど、政治上の大きな変化が相次いだ年であった[11)]。この作品が執筆された明確な日時は不明であるが、現実の世界情勢の変化が、「人類を信じていた者」(ebd.) の死、すなわち人類を信じることが許されなくなった状況に反映されているとも考えられる。年号に直接言及していないものの、「シナゴーグが燃えた時 (Als die Synagogen brannten)」(I, 280-281/ Kub, 53) も、1938 年に起きた「水晶の夜」を想起させる[12)]。

年号を題名に含んだエピグラムの一つに、「1948 年のドイツ (Deutschland 1948)」(I, 281/ Kub, 55) がある。この作品は「大国へ宛てて (Adresse an die Großmächte)」という副題を持ち、冷静な話し合いを求めている。

落ち着いてこのことを話せるでしょう：
例えあなたたちが因果関係に思いを寄せ
極端な正義を尊敬するのだとしても、―
新たな愚かさはかつての犯罪によって
せいぜい説明されるだけで、
補償を定めるわけではない。 (ebd.)

実際の「1948 年のドイツ」は、通貨改革やベルリン封鎖が起こり、アメリカ・イギリス・フランスとソビエトの緊張下にあった[13)]。「1948」年における

「大国」はこの四か国を想起させ、当時の時代を反映した作品としても理解できる。この作品もまた、執筆された正確な日時は不明であり、実際の出来事と作品の成立の前後関係を断言することはできないが、四か国の占領下にあったドイツの状況を反映している可能性は高いだろう。

実際の出来事を想起させる作品は、1933 年までの 4 詩集にも含まれており、一部の作品は『自分の本に目を通す』に再録されている。例えば「ヴェルダン、何年も後に (Verdun, viele Jahre später)」(I, 217-218/ BDmB, 32-33) や「我が息子への手紙 (Brief an meinen Sohn)」(I, 177-178/ BDmB, 20-21) には、第一次世界大戦の激戦地であった Verdun や Vaux、Ypern への言及が見られる。また、同様に再録された「1899 年生まれ (Jahrgang 1899)」(I, 9-10/ BDmB, 101-102) は第一次世界大戦の想起に加え、ドイツ革命やインフレーションを想起させる描写も含んでいる。

2. 2. 自伝的要素

一部の作品には、実際のケストナーを想起させる要素が見られる。「不要な問いかけに対する必要な回答 (Notwendige Antwort auf überflüssige Fragen)」(I, 281/ Kub, 56) で、語り手は自身を「ザクセンのドレスデン出身のドイツ人」であり「ドイツで育った木のようなもの」だと説明している。これはケストナー自身の出身と合致する (ebd.)。さらに「コペルニクス的性格を求む (Kopernikanische Charaktere gesucht)」(I, 296/ Kub, 112) や「ポジティブなものはどこに行ってしまったのですか、ケストナーさん？ (Und wo bleibt das Positive, Herr Kästner?)」(I, 170-171/ BDmB, 163) には作者と同名の人物が登場し、他の作品以上に詩と作者の繋がりを強く感じさせている。実際にケストナーが作品に記された通りの考えを持っていたかは作品から判断できないが、読者が作中の人物と作家のケストナーを重ね、作者の考えとして解釈する可能性は、他の作品以上に高いといえるだろう。作中人物と作者を関連付けて捉えた場合、読者は作者の主張をより強く感じ取ると思われる。

2. 3. 日常的なテーマ

2 冊の詩集には、人々の生活に焦点を当てた作品も見られる。『自分の本に目を通す』の中には、発表当時は新しかった「働く女性像」が描写された「若い女性のコーラス (Chor des Fläuleins)」(I, 12/ BDmB, 128) 、道徳観念の低下を描写した「道徳的な解剖学 (Moralische Anatomie)」(I, 47/ BDmB, 147) や「少女の嘆き (Mädchens Klage)」(I, 58-59/ BDmB, 118-119) など、当時の社会が垣間見える作品が含まれている。同時に、「即物的なロマンツェ (Sachliche Romanze)」(I, 65/ BDmB, 17) のような、社会全体ではなく個人の領域に踏み込んだ作品も見られる。

『短く簡潔に』の中には、特定の場所や時代を想起させる要素を持たず、人間の生き方を語った作品や、人生における道徳や真理を簡潔に記した作品が含まれている。例えば、『ケストナー博士の抒情詩の薬箱』から再度収録された「モラル (Moral)」(I, 277/ Kub, 39) においては、「善は存在しない／それを為す以外には。」(ebd.)と道徳が語られ、「新年に向けて (Zum Neuen Jahr)」(I, 271/ Kub, 14) の中では、「人生とはいつも／生命の危機だ。」(ebd.) と、人生について述べられている。このような詩は、時代の特徴を示す要素を多数含んでいた多くの詩と異なり、「生」そのものを主題に置いている。

3. 詩集の特徴（２）: エピグラム形式

『短く簡潔に』に多数見られるエピグラムという形式は、ケストナーが戦前から継続して用いている形式である。

先に述べた通り、『短く簡潔に』の収録作品は、多くが終戦前に執筆されていた。詩集の形にまとめられた際に初めて発表された作品が多いが、一部は『ケストナー博士の抒情詩の薬箱』で既に発表されたものである。Helga Bemmann は、『ケストナー博士の抒情詩の薬箱』が発行される以前、ケストナーが必ずしも売れる必要のない、自身を楽しませるものを自由に書きたいと望んだと説明している[14)]。Sven Hanuschek も『椅子の間の歌』に収録された「何が起こっても！ (Was auch geschieht!)」(I, 175/ BDmB, 61/ Kub, 49) や「時

事的なアルバムの詩行 (Aktuelle Albumverse)」(I, 213/ BDmB, 155)[15] などの作品に、既にエピグラムの傾向が見られると指摘している[16]。また、高橋健二は『短く簡潔に』を「久し振りにケストナーらしいピリッとした鋭い着想を満喫させた[17]」詩集だと評している。すなわち、エピグラムという形式は、元よりケストナーの作風に適しており、以前から好んで用いられていた形式の一つでもあった。

『短く簡潔に』の前書きにおいて、「詩学に則った真のエピグラム」は「“続きへの期待”を呼び起こし、強調しながら“種明かし”をする必要がある」ものだと説明されている (Kub, 9)。Bemmann も「それ(引用者注 : エピグラム)は決してウィットを欠いてはならず、言葉の抜け目のなさを欠いてもならなかった。それどころかアクチュアルなものが、この文学的なやり方で言語化された。[18]」と説明している。

このようによく考えられた詩行が求められる形式を、ケストナーが戦後も好んでいたことは、同詩集の前書きからうかがえる。

> ［…］ この小さな本は、たとえ作家たちが失われた芸術形式を覚えていないとしても、読者を求めている。古いエピグラムが再び読まれるという要求と、新しいエピグラムを書く欲求が高まれば、この本の目的は達せられるだろう。[…] エピグラムは死んだのか？　エピグラムよ生きよ！ (Kub, 12)

詩集の目的に関するこの記述から、ケストナーはエピグラムが広く人々に読まれると同時に、新たなエピグラムが書かれ、この形式が現代でも用いられるものとなってほしいと願っていたように思われる。すなわち、エピグラム形式は引き続きケストナーにとって好ましいものであり、今後も生き長らえていく価値のある重要なものだと思われていたのではないだろうか。

4. 詩集の特徴（３）: 批判と警告

4. 1. 反戦詩

『自分の本に目を通す』には反戦詩も複数収録されている。この詩集は戦前の作品の選集であるため、作品そのものは戦後の作者の思想を反映していないが、選ばれた作品の傾向に作者の意図が表れていると考えられるだろう。特に冒頭と結びの詩がいずれも戦争をテーマとして扱っている点には、意図があるように思われる。

この詩集は、「君は知るだろうか、大砲の花が咲く国を？ (Kennst du das Land, wo die Kanonen blühn?)」(I, 26/ BDmB, 13-14) から始まる。そして、第 3 詩集『ある男が通知する』の最後に収録されていた「最終章 (Das letzte Kapitel)」(I, 171-172/ BDmB, 174-175) が再び最後に置かれている。

Harald Haltung は、1933 年までに出版された 4 詩集において、巻頭と巻末の作品はその配置にも効果があり、巻末の作品は結びに置かれることで強いメッセージ性を持っていると指摘している[19)]。そして 4 冊の詩集の始まりと終わりに置かれた 8 編の詩のうち、6 編が『自分の本に目を通す』に収録されている。すなわち、これらの作品は作者にとって戦後も重要であり、引き続き読者に訴えたい内容を含んでいると考えられる。

「君は知るだろうか、大砲の花が咲く国を？」は、タイトルと同じ問いかけから始まる作品である。この問いかけは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中に登場する「ミニヨンの歌」の冒頭の詩行をもじったものである[20)]。ケストナーの作品において、「君 (du)」が読者であるのかは定かでないものの、二人称を使用することで、読者に自身が問われているかのような印象も与えている。そのため、読者はこの作品による戦争批判を、戦前の状況下での批判としてだけではなく、戦後の状況で投げかけられた問いとして読むことも可能である。その際、作品は戦争全般の批判というよりはむしろ、戦前の警告にもかかわらず戦争が起こったことへの批判として理解できる。

Drouve はこの作品について、「例えば社会経済との結びつきのような、軍国主義の支配の本当の原因は、ケストナーの他の反戦詩と同様、この作品の中には現れておらず、その原因は人間の愚かさと無思慮といったような解釈の

余地がある要素に限定されたままで、それによって時間的な具体性から十分な距離をとっている[21)]」と指摘している。Drouve の指摘は、社会から一歩引いて物事を見ていたケストナーの態度を的確に分析しているといえる。ヴァルター・ベンヤミンは、「左翼メランコリー (Linke Melancholie)」の中で、ケストナーの態度は政治的な行動に結びついておらず、特定の方向性を見出しているのではないと、実社会に対する距離を批判しており[22)]、Drouve が指摘する、社会問題の原因がテーマではないという指摘は、ベンヤミンと同じ点に注目しているといえるだろう。さらに、ケストナーの作品は、社会批判や社会風刺などのテーマを扱っているため、しばしば執筆当時の時代背景と関連付けて理解されるが、Drouve の分析は、このような従来の理解とは異なる普遍性を指摘しており、新たな観点からの分析といえるだろう。また、Klaus Kordon は『自分の本に目を通す』を「昔の、しかしアクチュアルな詩の選集[23)]」と評している。この評価も、受容される時代にかかわらず、ケストナーの作品は読者に訴えかける力を持っている点を指摘したものであり、Drouve 同様に、作品が持つ普遍性に注目した的確な評価であろう。

この選集の性格を、ケストナー自身は前書きの中で次のように語っている。

> […] 既に述べたように、これは回顧である。詩行は、1933 年以前に大都市やその他の場所がどう見えたかを示している。そして、どんなふうに一人の若い男が皮肉や批判、弾劾、嘲笑や大笑いを通して警告を試みたかも示している。[…] (I, 371/ BDmB, 11)

ここでは詩集の性質が回顧であると述べられているが、上述の通りケストナーの作品は、時代背景と繋がる要素を含む一方、時代を超えたアクチュアリティを持っている。そのため、過去の作品であっても、発表当時とは異なる解釈が可能であると考えられる。ケストナーは、反戦詩を再度示すことで、過去に行った警告を振り返ると同時に、最終的に戦争が起きてしまったことを反省的に見つめてほしいと考えていたのではないだろうか。そして、過去を

反省的に振り返る働きは、反戦詩だけではなく、批判と警告の性質を持つ過去の作品全てに対して期待されていたものだと考えられる。

加えて同選集に収録されている作品は、例え予言に見えようとも予言ではなかったが、それが予言的内容になってしまった原因はドイツ人の性格にあると、ケストナーは語っている (I,371/ BDmB, 10)。先に述べたように、この選集には 1933 年以前の社会や人々を描写した作品も含まれている。これらの作品が、この「ドイツ人の性格」を全て表現しているとは言えないが、過去を反省的に振り返るにあたって、こうしたテーマの作品にはかつての時代を知るための働きが期待されていたのではないだろうか。

ただし、戦前の時点で既に当時の状況を批判してきたことを強調することで、ケストナー自身がそのような自己イメージを作っていたともいえるだろう。Hanuschek は、戦後のケストナーが、終戦までの 12 年に渡って、「ミュンヒハウゼン (Münchhausen)」(1943) の脚本以外には何も書かず、外国にも行かなかったという印象を呼び起こそうとしていたと指摘している[24)]。さらに Hanuschek は、ケストナーがこのイメージ作りに際して、過去に行った必要な妥協を振り返り潔白を証明することだけを重要視していたのではなく、歴史の総括やドイツの民主化の宣伝、独裁的な動きを早くに認識して攻撃することを義務だと捉えていたと述べている[25)]。

Hanuschek が指摘する通り、ケストナーにとってより重要であったのは、過去の総括や独裁の予防、民主化の一助を担うことであっただろう。しかし同時に、戦後になって「執筆を禁じられ、沈黙せざるを得なかった作家」などの自己イメージを作ろうとした点は、戦時中の妥協の正当化や自己弁護のためであるとも考えられる。『自分の本に目を通す』で、過去の警告を振り返ることで、終戦以前から体制に反対してきた作家としてのイメージを強調しているともいえるだろう。

また、批判を通じた反省を期待する一方、『自分の本に目を通す』には、人類に対する諦念もうかがえる。再録にあたって、いくつかの詩には注釈が追加されているが、一部の注釈には警告が無意味に終わったことへの虚しさが

現れている。例えば「人類の発展 (Die Entwicklung der Menschheit)」(I, 175-176/ BDmB, 15-16) は、木の上に座った男たちが人類の発展を成し遂げていく様子を描きながら、彼らが基本的には猿のままであると結んでいる。人類の発展を寓意的に描き、根本的には進歩していないことを指摘しているこの作品に対し、ケストナーはただ「これ以上の注釈は過剰である」 (BDmB, 16) とだけ述べている。さらに「空腹は治療可能 (Hunger ist heilbar)」(I, 186-187/ BDmB, 66-67) の副題は「ドイツの寓意 (Eine deutsche Allegorie)」であり、「この詩の悲しい主題はどうやら永遠にアクチュアリティがあるらしい」(BDmB, 67) と注釈が加えられている。「最終章」の注釈では、この作品に「即物的な間違い」が含まれている可能性があり、「作者はおそらく日付を見誤ったのだろう」と述べられている (BDmB, 175) 。作中では、2003 年 6 月 12 日と 13 日が、人類の滅亡の日とされているが、再度戦争を経験した後、人類の破滅は作中に描かれているほど遠くないと思うようになったのではないだろうか。ケストナーはこの作品を通じて、滅びへ向かう人類の愚かさを批判すると同時に、実際に戦争を繰り返してしまったことからこの黙示録的な風景の実現も近いと感じ、「最終章」を執筆した当時の自分が、人類の滅亡は遥か未来のことだと「見誤った」(BDmB, 175) と捉えているのではないかと思われる。

4.2. 抑圧への批判

反戦だけでなく、ドイツに焦点を当てた作品や、政治への反発と警告をテーマとした作品も、戦後の選集に見られる。

1933 年以前の詩集では、『腰の上の心臓』の頃は軍国主義の思想や戦争そのものに対する批判が目立ったが、『椅子の間の歌』の頃にはより対象が明確になり、ナチに対する批判と警告の色合いが濃くなっていった。例えば『椅子の間の歌』に収録されている「ドイツ統一党 (Die Deutsche Einheitspartei)」(I, 214-215/ BDmB, 40-41) は 1930 年に「ジンプリチスムス (Simplicissimus)」に初めて掲載された詩[26)]で、架空の政党が勢力を増して一党に権力が偏っていく様を描いており、ナチ党の台頭を想起させる。このようなナチの権力拡大や独

裁体制に対する批判は、『自分の本に目を通す』にも引き継がれている傾向である。Hanuschek は反ナチの詩として「総統の問題、遺伝学的に考察して (Das Führerproblem, genetisch betrachtet)」(I, 186/ BDmB, 115) や「行進の歌 (Marschliedchen)」(I, 220-221/ BDmB, 103-104) を挙げており[27)]、これらの作品はいずれも『自分の本に目を通す』に再録されている。

先に述べた通り、『自分の本に目を通す』の収録作品のうち、3 編は 1933 年以前の 4 詩集に含まれていない。そのうち、2 作品に政治への反発と警告が見られる。4 詩集から選ばれた詩で構成された作品であると作者自身が説明しているにもかかわらず、例外的に詩集以外から選ばれたこれらの作品は、収録すること自体に意味があったと考えられるため、本稿ではこの 2 編に注目したい。

「極めて右で歌うこと」は 1930 年 10 月に『世界舞台 (Weltbühne)』に掲載された作品で、ナチ党が躍進した状況に焦点が当てられ、「愚かさ (Dummheit)」が始まっていくと述べられている。

明るく高らかにテーブルでグラスを響かせろ！
今第三帝国がやってくる！
我々の票集めに乾杯を！
それが最初の一撃だった！

風向きが変わった。今や
ギリシア的で北方的な風がピューピューと吹く
ヴォータンの雷にもかかわらず、今始まる
国民運動という愚かさが。[…] (I, 248/ BDmB, 72)

「偉大な時代」の中では、ケストナーは「かつてなく偉大な時代」について語り、時代の変化を批判的に描いている。第 4 節において、再び彼は「愚かさ」に焦点を当てている。

[…]
警告を試みるものは、軽蔑でもって罰せられる。
愚かさは流行病になる。
今日ほど偉大な時代はいまだかつてなかった。
国民は精神錯乱へ落ちていく。 (I, 231/ BDmB, 165)

このように、2 編の詩は人々が理性を失って、「愚かさ」が支配する時代を批判している。

人間の理性と愚かさについては、他の作品でも言及が見られる。「全方位への悲歌 (Elegie nach allen Seiten)」(I, 198-199/ BDmB, 113-114) では、世界は落葉と共に理性を喪失し、冬と愚かさが遺産となる。軍国主義を批判した詩「もう一つの可能性 (Die andere Möglichkeit)」(I, 121-122/ BDmB, 106-107) の中では、戦争に勝利していたのであれば「理性は鎖に繋がれただろう」(I, 122/ BDmB, 107) と語られ、軍国主義がはびこる世界において、理性が抑圧される様子が描かれている。こうした描写から、ケストナーは戦前より独裁や軍国主義による抑圧は人々の理性を害し、そのような権威に従う行為が愚かであると批判してきたことがうかがえる。

ケストナーは特に、知識や文化の弾圧に対して強い反感を示している。1933 年、ケストナーの著書の一部はその内容のために焚書された[28)]。ケストナーは戦後、焚書について繰り返し批判的に語っている。1953 年の講演「焚書について (Über das Verbrennen von Büchern)」(VI, 638-647) の中では次のように述べられている。

[…] 1933 年から 1945 年までの出来事は遅くとも 1928 年には撲滅されなければならなかった。それ以降では遅すぎた。[…] これが教訓であり、1933 年に起こったことの結論である。これが、我々が自身の経験から得なければならない結論であり、私の講演の結びである。恐怖をもたらす独裁は、

それが力を持つ以前にだけ、撲滅される。[…] (VI, 646)

さらに、1965 年に発表された「読み物、点火剤、燃料 (Lesestoff, Zündstoff, Brennstoff)」(VI, 587-590) の中では、1965 年[29]10 月初めに起こった、デュッセルドルフの若者たちによる焚書について言及している。ケストナーの報告によれば、「敬虔なキリスト教徒連盟 (Bundes Entschiedener Christen)」を名乗る若者のグループが、ケストナーやナボコフ、ギュンター・グラスの本をガソリンで燃やした。若者たちは焚書の実行を事前に当局へ届け出ており、当局は当初予定されていた広場ではなく、ライン川の岸辺で行うように指示をするだけで、焚書そのものを止めることはなかった。そして実際に焚書が行われた後、ライン川の岸辺で本を燃やすことは禁じられていないとして、市長は若者たちの行為を容認した。最終的に市長は自らの誤りを訂正してはいるが、ケストナーはこのテキストの中で、焚書行為の実行と容認に対し怒りを示している。

こうした講演や文章は、ケストナーが独裁による抑圧、特に知識への弾圧に強い反発を覚えていたこと、戦後は抑圧に対する抵抗の重要性をより強く感じていたことを示している。この傾向は、『自分の本に目を通す』と『短く簡潔に』に収録する作品の選択にも反映されていたように思われる。

5. 理性と愚かさへの言及、子供と大人の教育

これまでに述べた通り、抑圧に対する反抗と、理性と愚かさというテーマは、今回分析した 2 詩集によく見られる特徴の一つである。

Drouve は、「愚かさ」のモチーフは「社会現象や社会の苦境、または社会全体の発展がテーマとなる時に、ケストナー作品の中にいつも現れる[30]」と指摘し、このテーマを扱った作品として「文化の舌は広範囲に届く (Die Zunge der Kultur reicht weit)」 (I, 47-48/ BDmB, 131-132) 、「行進の歌」、「世界は丸い (Die Welt ist rund)」(I, 17-18/ BDmB, 62-63)、「低級な数学 (Niedere Mathematik)」(I, 285/ Kub, 70) 、「想起の思い出に (In memoriam memorae)」(I, 276/ Kub, 34)

などを挙げている[31]。同様にエピグラム「記念帳の中の現在 (Der Gegenwart ins Gästebuch)」(I, 286/ Kub, 74) や、先に挙げた「1948 年のドイツ」も「愚かさ」に言及している。

対称的な「理性」というテーマも、戦後に発表された他の物語で扱われている。1948 年に『ノイエ・ツァイトゥング』に掲載された「理性についてのメルヒェン (Das Märchen von der Vernunft)」(II, 160-162) は、筋の通った物事について時折考える習慣のある「心優しい老紳士」(II, 160) が、平和の中で人々が生きるために何をするべきかを地位ある人々に訴えかける。

子どもたちのために平和な世界を求める『動物会議』(1949) でも、同様のテーマが扱われている。「理性についてのメルヒェン」で老紳士が担っていた役割は、この作品の動物たちに引き継がれている[32]。新聞で地球上の多数の惨禍が報じられているにもかかわらず、人間たちの会議が成果なく終わったという知らせを受けたその日は「動物たちにとってとても愚かしい日になった」(VIII, 257) 。動物たちは子どもたちのために行動を起こし、人間たちに国境や軍隊の廃止などの条件を飲ませた。この結果は作中で「我々が人間たちを正気に立ち返らせたこと (Daß wir die Menschen zur Vernunft gebracht haben)」(VIII, 316) と表現されており、争いをやめて平和で安全な世界を作ることが理性ある状態だと考えられている。

これらの物語から、ケストナーが理性的な思考が平和にとって重要だと考えていると同時に、「子ども」を重要視していたことがうかがえる。ケストナーにとっては、子どもの教育が将来のために重要であった。このテーマについて「ドイツ人の忘れやすさについて (Von der deutschen Vergeßlichkeit)」(VI, 612-614) の中で次のように語っている。

> […] 未来を信じる者は、青少年を信じます。青少年を信じる者は、教育を信じます。教育を信じる者は、手本の意義と価値を信じます。[…] 真剣に例を思い出せ！　手本を作れ！　そして雄鶏が三度鳴く前にそれを為せ！ (VI, 613-614)

ここでは青少年と未来、教育の関連と同時に、手本を持つことの重要性も主張されている。「青少年、文学そして青少年向け文学 (Jugend, Literatur und Jugendliteratur)」(VI, 602-612) においても、「青少年は手本を必要とする、彼らがミルクや新鮮なパンと新鮮な空気を必要とするように」(VI, 604) と、再び青少年と手本の関係への言及が見られる。

こうした発言は、ケストナーにとって未来をより良くするために子ども・青少年が重要であったことだけでなく、そのために教育を重要視していたことを示している。青少年教育の一環として、ケストナーは 1946 年 3 月から 1948 年まで、青少年向け雑誌『ペンギン (Pinguin)』の編集を行っており、この雑誌は子どもたちが自身の人生をより良くするためのものとして考えられていた[33)]。また『動物会議』が「政治的な子ども向けの本[34)]」であったことも、子どもたちへの訴えかけを意図していると思われる。

さらに、青少年教育だけではなく、彼らの手本を作ることも重要だと考えていたことから、手本となりうる「大人」の教育も重視していたと思われる。Bemmann によれば、ケストナーは「教師をまず正しく教育したなら、子供たちも正しく教育できる[35)]」と考えていた。ただし、ケストナーの教育は、必ずしも上の立場から意見を押し付けるものではなく、考えるテーマを提示し、読者に自ら考えさせて「理性的」な方向に導こうとする側面が強いものであると思われる。

Birgit Ebbert は、ケストナーが大人と子どもの教育における最上の目標としていたのは、「人間性、つまり他人の心身の苦しみを感じ取り、多かれ少なかれ他人に配慮し、環境の改善に取り組む能力[36)]」であると指摘している。Ebbert によると、ケストナーは大人向けの教育として、風刺や新聞記事を通じて、真実や行動の結果と対峙させる方法を取っており、その目的は人類の未来のためであった[37)]。さらに Ebbert は、大人は過去の再来を防ぐために過去の苦しみを何度も思い出す必要があるとケストナーが考えていた、と述べている[38)]。『自分の本に目を通す』と『短く簡潔に』に見られる、過去を描写

する作品や、時代批判または警告の性格を持つ作品は、過去を風化させずに対峙させ続けるための働きを担っているといえるだろう。同時に、一部の作品で扱われている道徳的な教えは、人生をより良くする可能性があり、子どもの手本を作るために役立つ可能性がある。すなわち、この 2 詩集が持つ特徴の多くは、Ebbert が指摘する「大人を対象とした教育の手法」の一つとして理解できる。過去を回想する内容、戦争の批判と警告的な内容は、戦前の段階で既に見られたが、将来のために教育を重視する傾向が見られる戦後のケストナーにとっては、上述のような「大人に向けた教育の方法」としての働きを持っていたといえるだろう。

ただし、「啓蒙の限界 (Die Grenzen der Aufklärung)」(I, 293/ Kub, 101) では次のように語られている。

太陽の輝きであろうと、星の煌めきであろうと：
トンネルの中はいつも暗いままだ。(ebd.)

光で照らしきれない暗いトンネルは、道行きもわからず、中の様子もはっきりとしないままである。光、すなわち理性をもってしても、明瞭に理解できないものがあることを、この作品は象徴的に描いていると考えられる。ここでの「啓蒙」は、人を理性的にすること、つまりケストナーにとっての教育であると考えられ、この作品からは教育の限界、あるいは教育が本当に効果を発揮するのか不明であることを、ケストナー自身も理解していることがうかがえる。

また、ケストナーは人類を良い方向に向かわせたいと思う一方で、大人に対する失望も持っている。先述の通り、『動物会議』では子どもたちを大切なものとして描く一方、大人たちは「理性的でない」存在として描かれている。さらに、「卑劣さの発生 (Genesis der Niedertracht)」(I, 166) の中にも、ケストナーの大人と子どもに対する認識が見られる。この作品は終戦前のもので、『ある男が通知する』に収録されている。作中では「子どもは素晴らしくて開かれ

た心を持つ良い存在で、／しかし大人たちは耐え難いものだ。」(I, 166) と、大人と子どもが対比されている。そのうえ、あらゆる性格は善と悪が同居しているために二分することが可能であるが、悪は治療不可能で、善は子どものうちに死んでしまうと説明されている。ここに、ケストナーから見た大人と子どもの姿が表現されている。

6. 人類への期待

このようにケストナーは教育の不完全性も理解し、また子どもとは逆に大人を悪しき存在として捉えていたと思われるが、それでもなお、すべての読者に対して文章を通じて訴えかけることを諦めていなかったと考えられる。『自分の本に目を通す』の前書きでは「風刺家は沈黙できない、なぜならば彼らは教師であるからだ」(I, 371/ BDmB,11) と述べられており、皮肉や批判などを通じた警告の試みは無意味であったが、そのことが風刺家を沈黙させることはなく、これからも沈黙させないと語られている[39)]。さらに「ケストナーについて語るケストナー (Kästner über Kästner)」(II, 323-328) では、作者は“ケストナー”を「教師」、「モラリスト」、「合理主義者」、そして「ドイツ啓蒙主義の曽孫」と説明している (II, 326) 。こうした自認から、『自分の本に目を通す』をはじめとする戦後に出版された詩集は、教師としての作者の言葉であるともいえるだろう。すなわち、戦前と同様に、詩の描写を通じて、読者にメッセージを発していると考えられる。そして、同様の傾向は、戦後の詩集だけではなく、戦後の講演や小説、散文の中にも見られる。

特にケストナーの人類への期待を示していると思われるのが、『自分の本に目を通す』の構成である。詩集全体を通じて批判や警告を繰り返しながらも、最後を人類の終焉で締めくくる構成は、人類に絶望しているようにも見える。先に述べた通り、戦前の度重なる警告にもかかわらず、独裁や抑圧、戦争は起こり、注釈の中にはそのことへの失望と諦めがうかがえる箇所がある。しかしその一方で、ケストナーはまだ人間が良くなる可能性を信じていたと思われる。そのことは同詩集の前書きに表れている。

[…] そう、もしも人類が十分に罵られ、打ちのめされ、侮辱され、嘲笑されたなら、ひょっとしたら少しだけ、ごくわずかにだけ良くなれるかもしれないという、世界のあらゆるばかげたことにもかかわらず、無駄で無意味な希望が、彼ら（引用者注：教師たち）の心の中でどこよりも目につきにくい片隅に遠慮がちに花咲いている。風刺家は理想家である。(I, 371/ BDmB, 11)

この発言を踏まえると、「最終章」は人類の終焉の「予言」ではなく、起こりうるかもしれない未来を描くことで、その実現を回避するように意識させる「警告」であるといえるだろう。Eva Demski は、「最終章」に描かれた恐ろしい出来事はそれを追い払うために描写され、想像しえない出来事の発生を未然に防ぐために語られていると解釈している[40)]。すなわち、詩による「警告」から読者は学ぶことができるという期待がまだあるからこそ、詩集の終わりにこの作品を置き、詩に描写されたような未来を回避するように訴えかけているのではないだろうか。大人への失望を表明しながら、このような詩集を編んでいることも、まだ人類に希望を見出していたことを示しているように思われる。

また、『短く簡潔に』がエピグラム集であることも、読者へ訴えかける詩の力を信じ続けていることを表していると思われる。前述の通り、エピグラムそのものは以前から用いられていた、ケストナーの作風にあった形式で、戦後の主張のために新たに採用された形式ではない。しかし、人間の生き方や人生にとって大切なものをテーマとして語るエピグラムは、良い未来を作る目的のもとでは、読者に対する教育としての側面も持っていたのではないだろうか。

この 2 冊の詩集の構造やテーマが、読者に対するメッセージを根底に含んでおり、過去を思い出す内容や、人生にとって助けとなる内容を繰り返し扱っている点が、ケストナーの教育に対する強い意志を示していると考えられ

る。ケストナーは戦前から既に、読者にとって有用な詩を書く詩人であることを望んできたが[41)]、戦後でも詩の働きに対する認識は変化していないと言えるだろう。さらに、これまでのケストナーの作品に見られた、知的で鋭い視点もエピグラムの中に継続して見られる。

一方で、戦後に発信しようとしたメッセージは戦前と異なる傾向が見られ、過去に対する強い反省と独裁や抑圧への抵抗、そして実際の独裁や戦争を経験したがゆえに強まった、未来をより良いものにするための教育を求める思いが、戦後の出版物や発言の中にうかがえる。

また、人々へ訴えかける内容の変化に加えて、主張の方法にも変化が見られる。戦後のケストナーは、文章だけではなく実際の行動でも自分の意見を表明した。Hanuschek は戦後のケストナーの活動を「彼は 1945 年以降文学作品の外で決定的に急進的になった[42)]」と評している。例えば 1950 年代には核の軍備に反対して行動を起こし、反核運動に参加して署名をしているほか、1958 年には当時の西ドイツ政府を鋭く批判する講演を行っている[43)]。1961 年には核兵器に反対するイースター行進に参加し、1963 年の広島への原爆投下を追想する活動にも参加した。さらにその後には、ベトナム戦争に反対するデモで挨拶の言葉を述べており、社会に対する意見を文章だけではなく行動で示すようになっている。

7. 終わりに、今後の課題

戦後に出版された『自分の本に目を通す』と『短く簡潔に』は、既に発表された作品の再録、または未発表ではあったが 1945 年の終戦以前に書き留められていたものを中心として構成されたものであった。作品の執筆当時をうかがわせる、時代と結びついた要素を持つ詩が多数収録されているが、ケストナーの作品は人間の理性などの普遍的なテーマを中心に据えており、そのためにそれぞれの作品は読まれる時代が変わった場合でもアクチュアリティを保持している。

ケストナーはこの 2 冊の詩集を通じて、独裁と弾圧を批判し、人間を害す

る行為の一つとして、戦争行為も引き続き批判している。その際、人間の理性と愚かさを繰り返しテーマとして扱い、平和を害する振る舞いとそれを容認する人々を批判している。一方で、特定の時代や対象をテーマとするのではなく、人生そのものをテーマとした作品やモラルを語る作品も見られる。

ケストナーは戦後、教育をより重要視しており、特に子ども・青少年の教育に関して熱心に活動をしていた。2 冊の詩集が、過去の反省や人生訓などの強いメッセージ性を持つのは、詩を通じて読者に特定のテーマを考えてほしい、という意図があったのではないかと思われる。

今後は、詩集以外の戦後のテキストが持つ、読者に対する主張に注目し、戦後のケストナーが社会に求めたものを考察していきたい。本稿で取り扱った２詩集は、大人と子どもの教育と平和の希求に、戦前以上に重きが置かれている点は新しい特徴であるが、その特徴はあくまで以前の傾向の延長にあるものである。一方で、同様に主題の変化が見られる『13 か月』は、これまでに見られなかった「自然」や「時間」といったテーマが前景に現れている。今後は本稿の中で考察した、戦後の作家活動の目標の変化を踏まえて、『13 か月』における主題の変化と、作品の働きの考察を進めていきたい。

【注】

1) ケストナーの作品は、特に注記しない限り、以下の著作集から引用し、本文中にローマ数字で巻数、アラビア数字で頁数を表記する。Erich Kästner: Werke in neun Bänden. Hrsg. von Franz Josef Görtz. München und Wien (Carl Hanser Verlag) 1998.
2) 本稿で言及する詩は、注 1 で挙げた著作集の巻数・頁数の後に、戦後出版の詩集における頁数も表記する。『自分の本に目を通す』に掲載された作品は、略号 BDmB (Bei Durchsicht meiner Bücher) とともにページ数を併記する。『短く簡潔に』に掲載された作品は、略号 Kub (Kurz und bündig) とともにページ数を併記する。
3) Remo Hug: Gedichte zum Gebrauch. Die Lyrik Erich Kästners: Besichtigung, Beschreibung, Bewetung. Würzburg (König&Neumann) 2006. S. 56.（以下、本書からの引用は Hug と記載し、ページ数とともに表記する。）
Hug の注釈と、Werke in neun Bänden Band I における Harald

Haltung の注釈によると、この 3 作品はいずれも『世界舞台 (Die Weltbühne)』で初めて発表されたものであった。掲載日時は次の通りである。「極めて右で歌うこと」: 1930 年 1 月 10 日、「偉大な時代」: 1931 年 8 月 11 日、「ある男声のためのホテルの独唱」: 1932 年 11 月 8 日。参考 : Harald Haltung: Kommentar. In: Erich Kästner. Werke in neun Bänden. Band I. S.449, 451, 455.（以下、同注釈内からの引用は Haltung と記載し、ページ数とともに表記する。）

4) Werke in neun Bänden Band I の中にも同詩集の内容が掲載されているが、1933 年までに出版された詩集から再録されている作品は、初出の詩集の項にのみ掲載されている。また、全集では「1952 年の支出と収入 (Soll und Haben 1952)」(I, 282) の作品名は、本稿で使用したアトリウム社の出版した詩集では「1950 年の支出と収入 (Soll und Haben 1950)」(Kub, 60) となっている。

5) Haltung, S. 461.

6) Haltung, S. 463.

7) 2 詩集の評価は次の文献を参考にした。
高橋健二『ケストナーの生涯―ドレースデンの抵抗作家』福武文庫、1992 年、174 ページ。（以下、本書からの引用は高橋と記載し、ページ数とともに表記する）
Klaus Kordon: Die Zeit ist Kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästners. Weinheim Basel (Gulliver) 1998. S. 233, 248.
Sven Hanuschek: Erich Kästner.Reinbek (Rowohlt) 2015. S. 106. （以下、本書からの引用は Hanuschek (2015)と記載し、ページ数と共に表記する。）
Franz Josef Görtz; Hans Sarkowicz: Erich Kästner. Eine Biographie. München (Piper) 1998. S. 307-308.
Isa Schikorsky: Erich Kästner. München (Deutsche Taschenbuch) 1998. S. 121-122.

8) Andreas Drouve: Erich Kästner. Moralist mit doppeltem Boden. Marburg (Tectum) 1999.S. 82-94, 101-111, 116-118,122-123, 141-143.（以下、本書からの引用は Drouve と記載し、ページ数とともに表記する。）

9) Hug, S. 34-36.

10) Haltung, S. 468.

11) 坂井榮八郎『ドイツ史 10 講』岩波書店、2003 年、193-194 ページ。（以下、本書からの引用は坂井と記載し、ページ数とともに表記する。）

また、ケストナーは後年、長編小説執筆のために年表を制作しているが、その中でもこれらの出来事を挙げている。参考：Erich Kästner: Das Blaue Buch. Hrsg. von Sven Hanuschek, Urlich von Bülow, Silke Becker. Zürich (Atrium) 2018. S. 331.

12) Haltung. S. 468.
13) 坂井、210 ページ。
14) Helga Bemmann: Humor auf Taille. Erich Kästner – Leben und Werk. Berlin (Verlag der Nation) 1983. S. 324.（以下本書からの引用は Bemmann と記載し、ページ数とともに表記する。）
15) この作品の一部は「アルバムの詩行 (Albumsvers)」として『短く簡潔に』に収録されている。参考: Erich Kästner: Kurz und bündig. Zürich (Atrium) 1950. S. 96.
16) Sven Hanuschek: Keiner blickt dir hinter das Gesicht: das Leben Erich Kästners. München (Carl Hanser) 1999. S. 193. （以下、本書からの引用は Hanuschek (1999)と記載し、ページ数とともに表記する。）
17) 高橋、174 ページ。
18) Bemmann, S. 325.
19) Harald Haltung: Nachwort. In: Erich Kästner: Werke in neun Bänden. Hrsg. von Franz Josef Görtz. Band I. München und Wien (Carl Hanser Verlag) 1998. S. 381.
20) Haltung. S. 406.
21) Drouve, S. 87.
22) Walter Benjamin: Linke Melancholie. Zu Erich Kästners neuem Gedichtbuch. In: Walter Benjamin: Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe. Hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz in Walter Benjamin Archiv. Band 13.1. Berlin (Suhrkamp) 2011. S. 303
23) Klaus Kordon: Die Zeit ist Kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästners. Weinheim Basel (Gulliver) 1998. S. 233.
24) Hanuschek (2015), S. 103.
25) Hanuschek (2015), S. 103-104.
26) Haltung, S. 445. なお、初掲載時の作品名は„Die deutsche Einheits-Partei“ であった。
27) Hanuschek (1999), S. 193.
28) Kordon, S. 145.
29) ケストナーの報告 (VI, 587) の中では「10 月の初め」とだけ述べられている。年号については Klaus Doderer が自著の中で記述している。参考：Klaus Doderer: Erich Kästner. Lebensphasen -

politisches Engagement - literarisches Wirken. Weinheim und München (Juventa) 2002. S. 102.

30) Drouve, S. 107.
31) Drouve, S. 107-110.
32) Sven Hanuschek: Kommentar. In: Erich Kästner: Der Herr aus Gras. Hrgs. von Sven Hanuschek. Zürich (Atrium) 2015. S.278.
33) Hermann Kurzke: Kommentar. In: Erich Kästner: Werke in neun Bänden. Hrsg. von Franz Josef Görtz. Band II. München und Wien (Carl Hanser Verlag) 1998. S. 422.
34) Hanuschek (2015) , S. 116.
35) Bemmann, S.401.
36) Birgit Ebbert: Erziehung zu Menschlichkeit und Demokratie. Erich Kästner und seine Zeitschrift „Pinguin“ im Erziehungsgefüge der Nachkriegszeit. Frankfurt am Main (Europäischer Verlag der Wissenschaten) 1994. S. 115. （以下、本書からの引用は Ebbert と記載し、ページ数とともに表記する。）
37) Ebbert, S. 114.
38) Ebbert, S. 116.
39) Werke in neun Bänden. Band I, S. 371.
40) Eva Demski: Flugzeuge mit toten Piloten. In: Marcel Reich-Ranicki (Hrsg.): 1400 deutsche Gedihte und ihre Interpretation. Band 8. Von Bertolt Brecht bis Erich Kästner. Frankfurt am Main und Leipzig (Insel) 2002. S. 443-447. ここでは 447 ページを参考にした。
41) ケストナーは『鏡の中の騒音』に収録された「散文の途中発言」(I, 87-88) の中で、読者の人生に残る詩を書くように努めている詩人がいて、そういった詩は読者の魂に有用であるからこそ退屈せずに読めると述べている。それと共に、そのような詩人でありたいと述べている。
42) Hanuschek (2015), S. 130.
43) ケストナーのデモ活動と講演については次の文献を参考にした。Hanuschek (1999), S. 401-402.

参考文献

【一次文献】

Kästner, Erich: Werke in neun Bänden. Hrsg. von Franz Josef Görtz. München und Wien (Carl Hanser Verlag) 1998.

Bd. I. Zeitgenossen, haufenweise. Gedichte. Hrsg. von Harald Haltung in Zusammenarbeit mit Nicola Brinkmann.

Bd. II. Wir sind so frei. Chanson, Kabarett, Kleine Prosa. Hrsg. von Herman

Kurzke in Zusammenarbeit mit Lena Kurzke.
Bd. VI. Splitter und Balken. Publizistik. Hrsg. von Hans Sarkowicz und Franz Josef Görtz in Zusammenarbeit mit Anja Johann.
Bd. VII. Eintritt frei! Kinder die Hälfte! Romanen für Kinder II. Hrs. von Franz Jose Görtz in Zusammenarbeit mit Anja Johann.

Kästner, Erich: Bei Durchsicht meiner Bücher. Eine Auswahl aus vier Versbänden. Neuausgabe. Zürich (Atrium) 2017.
Kästner, Erich: Kurz und bündig. Zürich (Atrium) 1950.
Kästner, Erich: Der Herr aus Gras. Herausgegeben von Hanuschek, Sven. Zürich (Atrium) 2015. S.278.
Kästner, Erich: Das Blaue Buch. Hrsg. von Sven Hanuschek, Urlich von Bülow, Silke Becker. Zürich (Atrium) 2018.

【二次文献】

Bemmann, Helga: Humor auf Taille. Erich Kästner – Leben und Werk. Berlin (Verlag der Nation) 1983.
Benjamin, Walter: Linke Melancholie. In: Benjamin, Walter: Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe. Hrsg. von Christoph Gödde und Henri Lonitz in Walter Benjamin Archiv. Band 13.1. Berlin (Suhrkamp) 2011. S. 300-305.
Band 13.1. Kritiken und Rezensionen. Hrsg. von Heinrich Kaulen.
Demski, Eva: Flugzeuge mit toten Piloten. In: Reich-Ranicki, Marcel (Hrsg.): 1400 deutsche Gedichte und ihre Interpretation. Band 8. Von Bertolt Brecht bis Erich Kästner. Frankfurt am Main und Leipzig (Insel) 2002. S. 443-447.
Doderer, Klaus: Erich Kästner. Lebensphasen – politisches Engagement – literarisches Wirken. Weinheim und München (Juventa) 2002.
Drouve, Andreas: Erich Kästner. Moralist mit doppeltem Boden. Marburg (Tectum) 1999.
Ebbert, Birgit: Erziehung zu Menschlichkeit und Demokratie. Erich Kästner und seine Zeitschrift 'Pinguin' im Erziehungsgefüge der Nachkriegszeit. Frankfurt am Main (Europäischer Verlag der Wissenschaten) 1994.
Enderle, Luiselotte: Erich Kästner in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Reinbek (Rowohlt) 1966.
Görtz, Franz Josef; Sarkowicz, Hans: Erich Kästner. Eine Biographie. München (Piper) 1998.
Hanuschek, Sven: Keiner blickt dir hinter das Gesicht: das Leben Erich Kästners. München (Carl Hanser) 1999.
Hanuschek, Sven: Erich Kästner. Reinbek (Rowohlt) 2015.
Hug, Remo: Gedichte zum Gebrauch. Die Lyrik Erich Kästners: Besichtigung, Beschreibung, Bewetung.Würzburg (König&Neumann) 2006.
Kordon, Klaus: Die Zeit ist Kaputt. Die Lebensgeschichte des Erich Kästners. Weinheim Basel (Gulliver) 1998.
Schikorsky, Isa: Erich Kästner. München (Deutsche Taschenbuch) 1998.

坂井榮八郎『ドイツ史 10 講』岩波書店、2003 年。
高橋健二『ケストナーの生涯―ドレースデンの抵抗作家』福武文庫、1992 年。

（きよさわ　なほ・博士前期課程在学中）